CLOSE UP!

排尿ケア管理室について

■説明は
徳島大学病院
排尿ケア管理室長
山本 恭代
（やまもと やすよ）

今回は、入院中に尿道カテーテルを使用した患者さんを対象に、排尿の自立が可能となるよう支援を行う本院の排尿ケアの取り組みについて、排尿ケア管理室の山本医師にお話しを伺いました。

排尿ケアの必要性

排尿とは、文字通り、尿を体外へ排出することを指しますが、尿意を感じてから、適切な場所に移動し、衣服を着脱、トイレなどに尿を排出し、後始末をするという健康な人には自然な行為がスムーズにできない場合、人は大変な苦痛を覚えることがあります。つまり、排尿が自己で完結して行えないということは、人間の尊厳に関わる大きな問題といえます。

入院中には、疾患や手術などの様々な要因により排尿のための尿道カテーテル留置を行うことがありますが、羞恥心といったデリケートな問題に加え、長期間使用による尿路感染症や、尿路結石、萎縮膀胱といった合併症、留置の違和感及び日常動作の制限などによる患者さんのQOL（生活の質）の低下といった問題もあります。しかし、抜去後に排尿困難や頻尿、尿失禁などのトラブルが生じることもあり、本院排尿ケア管理室では、不必要な尿道カテーテル抜去を目指すとともに、抜去後の症状が生じた患者さんや、症状が生じると予想された患者さんを対象に、患者さん本人が自立して排尿できるよう支援を行っています。

患者さんにひとこと

患者さん本人、そのご家族でお困りの排尿トラブルであれば、まず泌尿器科にご相談いただくとよいと思います。また、本院に入院される方は、排尿ケア管理室で解決できることがあるかもしれませんので、お気軽にご相談ください。

排尿ケア管理室の取り組み

本院では、平成30年から泌尿器科医師、看護師、理学療法士からなるチームで排尿ケアの取り組みを開始し、令和2年4月には、さらにソーシャルワーカー及び事務職員を加えた排尿ケア管理室を設置して、活動の充実を図っています。今年の4月からは薬剤師も参加するようになりました。

本院での新規の排尿ケア介入症例は、平成30年3月から令和4年3月までの4年間では約800症例となっています。介入する診療科としては泌尿器科が最も多くなりますが、脳神経外科や脳神経内科、整形外科など複数の診療科にわたります。

具体的な取り組みとして、排尿ケアの対象となる患者さんは、まず病棟看護師がスクリーニングにより抽出し、排尿日誌の記載や、排尿後の残尿測定を行い、排尿ケア管理室に連絡します。その後、週1回の排尿ケア回診時に排尿ケア管理室のメンバーと病棟看護師が患者さんの状態を診察し、多職種によるミーティングを行い、排尿誘導や自己導入の指導、リハビリ、骨盤底筋トレーニング、薬物療法や手術など患者さんに応じた包括的なケアや治療を行っています。

排尿ケア管理室のメンバー

回診の様子

今後の課題

本院は急性期病院ということもあり、患者さんの退院までの排尿ケアの介入回数は一人当たり約1.6回となっており、患者さんへの支援が完了しないうちに退院されるため、退院後の継続的な支援が課題となっています。排尿ケア管理室では、出来得る限り紹介状に排尿ケアに関する記載を行う対応を取っていますが、十分ではありません。患者さんの良い状態をキープするためには、退院後の患者さんの診療に携わる医療機関の排尿ケアへの理解が不可欠です。そのため、現在徳島県で排尿ケアを行う病院が中心となり、研修会を実施するなど排尿ケアに関する地域の関係づくりを行っています。